

# 桑名鉄城の訪中と「安晩帖」の伝来について

宮崎法子

はじめに

「安晩帖」は、八大山人の代表作として知られる名品である。筆者は、一昨年「安晩帖」について小論「八大山人の甲戌年」を所蔵館泉屋博物館の紀要に発表した<sup>1</sup>。ここでは、「安晩帖」の現状・制作事情と伝来などについて述べた上で、その大部分の画幅が描かれた康熙甲戌年（一六九四年）が、八大山人にとって、従来言われているように花鳥画創作における頂点を極めた年であったと同時に、パトロンたちとの交流のなかから、山水画創作への意欲が顕在化し、花鳥画から山水画へ画業の重心が移行し始めた重要な一年であったことを論じた。しかし、ここでは「安晩帖」の伝来については論を尽くせなかった。その後、「安晩帖」の伝来や、日本舶載当時の日中の文化的人的交流について、いささか知ることができたため<sup>2</sup>、ここに簡単にまとめておきたいと考える。なお、記述の都合上、内容の一部が前稿と重複することがあることを、あらかじめお断りしておきたい。

## 一・「安晩帖」の旧蔵者たち

世界的にも八大山人の最高傑作として名高い「安晩帖」は、昭和五五年（一九八〇）に、住友本家から泉屋博古館に、他の中国書画とともに寄贈された。もとは、住友家十五代当主住友友純（一八六四―一九二六）の長男で、分家の住友寛一（一八九六―一九五六）（号、無為庵）の所蔵品であった（敬称略、以下同じ）。

明治から昭和初期の、日本の政財界人や上流層の男性たちは、欧米留学などを行う一方、その教養の基盤として中国文化を学び、中国の文人趣味に親しみを持つ者が多かった。寛一の父、住友友純は、公家の徳大寺家から住友家へ養子として入った人物であったが、そのような時代の好尚にもれず中国青銅器の蒐集に熱心であった。当時の中国趣味において青銅器が最も格の高いものとみなされていたことや、住友家もともと銅の精錬業で財を成した縁によるといわれる。泉屋博古館は、住友家所蔵の青銅器コレクションの保管展示と中国考古学研究を目的に、昭和三五年（一九六〇）に設立され、昭和四五年（一九七〇）京都市鹿ヶ谷に展示施設が建立された。その名称は、江戸時代の住友家の屋号である「泉屋」を冠し、北宋の徽宗皇帝が編纂させた青銅器の絵入り図譜『宣

和博古図譜』に因んだ命名であった。<sup>3</sup>

さて、「安晩帖」は、京都で活躍していた篆刻家、桑名鉄城（一八六四―一九三八）の旧藏品であったが、寛一が所望して、他の数点の中国画とともに、昭和初期に鉄城から譲り受けたものである。桑名鉄城、本名箕、字星精、号鉄城は、富山県出身の篆刻家で、金沢に出て北方心泉（心泉については後に詳述する）に書を学んだ。のち明治三〇年から二度にわたり渡清し、上海などで篆刻の新風を学んで帰国、その後、篆刻・書の新派の大家として、大正から昭和初期にかけて京都で活躍した。鉄城は、寛一やその叔父にあたる西園寺公望（一八四九―一九四〇）の篆刻の師でもあった。

「安晩帖」の中箱の蓋裏には、鉄城の題記がある。

「：余三十年來所見山人画、多贋本、而其真跡罕也。此冊予曩得之、珍襲久焉。今無為先生、一見欣賞不置、仍割愛貽之、并記其由。：皆丁卯桂月 鉄城山人箕<sup>5</sup>とある（挿図1）。

（訳）私は三十年來、八大山人の画を見てきたが、贋作が多く真跡は罕であった。この冊は、私が曩に得たもので、久しく大切に伝えてきた。今、無為先生（住友寛一）が、一目見て気に入る、賞翫しきりである。したがって、これを割愛し貽り、あわせてその由を記す。：皆に丁卯（昭和二年・一九二七）桂月（八月） 鉄城山人箕

ここから「安晩帖」は昭和二年（一九二七）八月に、鉄城から寛一に譲られたことと、それ以前久しく鉄城の愛藏品であったことが分かる。

また、「安晩帖」の最終頁には、江上瓊山の筆になる、その約二〇年前の明治四一年（一九〇八）の跋があり、張庚『国朝画徵録』を引いて八大山人伝を記している（挿図2）。瓊山は「安晩帖」の題簽の筆者でもある（挿図3）。彼は、鉄城と同様に京都在住の南画家で書にすぐれ

ていた。この跋が書かれた明治四一年に「安晩帖」はすでに鉄城の所蔵であったと考えられる。瓊山は、跋尾に「追識」と述べていることから、それ以前の跋があった可能性もあるが（あるいは八大山人の自跋に対する「追識」であるかもしれない）、現在、瓊山以外の跋は伝わっていない。

他にも鉄城から寛一へ譲られ、現在泉屋博古館所蔵の高名な作品に、石涛「廬山觀瀑図」があるが、その中箱蓋裏にも鉄城の題識がある。

「：余曾游清国得之、觀賞藏之久矣、無為庵主人住友君一見彊求割愛不已、遂割讓、皆丁卯八月：」

（訳）私は、かつて清国に遊んでこれ入手し、觀賞し長く愛蔵してきたが、無為庵主人住友君（住友寛一）はこれを見して、割愛を強く求めてやまなかったため、遂に割讓することとした。皆に丁卯（昭和二年一九二七）八月

これにより、「廬山觀瀑図」と「安晩帖」は同時に、鉄城から住友寛一に割愛されたことが分かるのである。なお、翌年の昭和三年（一九二八年）には、高鳳翰「雪石図」が鉄城から寛一に割愛されている。その蓋裏にも「余三十年前得之、：」とあり、三十年前の訪中の際の購入品と考えられる。

鉄城が、明治三〇年とその数年後の中国再訪のうちに、宋元明清の書画を買い求めたことは、その所蔵画を選印刊行した『九華印室鑑藏画録』（京都・文星堂 一九二〇年）の自跋にも明記されている。内容的に興味深いため、以下、全文の書き下し文を掲げる。

「明治丁酉（三〇年）春三月、予始めて清国に航り、いささか杭蘇に遊ぶ。諸名流と締交し、宋元明清の名画珍蹟を撫覽するに、渴望禁ぜ

ず。遂に囊を傾け数十幅を購う。而して歸りて後数年、再遊し、購う所は数十幅を下らざるも、猶お且つ飽かざるがごとし。帰朝後、百方搜索して又佳画數幅を獲る。人或いは玩物喪志を以つて予を箴めるも、予曰く、玩物の源は之を愛するなり、其の流の弊は、沈溺するに至つて害を為す。古人すでに箴ある所なり。しかるに人々の風尚は殊にして、嗜好の僻在は免れざるところ。況んや書画の如きは、古人の心血を注ぐ所に於て、風韻の存する所なり。賞すれば當に我が神氣を暢ぶるべくして、未だかつてその害有るを見ざるなり。因りて所藏する所の卷冊掛幅八十有餘を選び、これを玻璃版印刷に付し、以つて二冊となし、題して曰く九華印室館藏画録と。同好に頒けてその楽しみをとみにせん。その書跡のごときは、則ち將に他日を俟つて、再行選印せん。嘗に庚申（一九二〇）夏日、桑名箕識す」。

ここには、鉄城の中国書画への傾倒ぶりが披瀝されていると同時に、そのコレクションの大部分が、明治三〇年と数年後の二度の清国訪問の際に、数十点ずつ直接中国で購入したものであり、さらに帰国後、様々な伝手を使つて入手した数点を加えたものであることが、明記されている。近代になって、中国との直接の交流が可能になるなかで、周知のように新たな中国画コレクションが形成されたが、そのなかでもこの鉄城のコレクションは特に早期のものであり、清国に赴いて自ら購入したことが明らかにも注目される。

## 二・過雲樓とそれ以前の伝来

さて、「安晚帖」は、清末蘇州の大收藏家、顧文彬（一八一―一八

八九）の旧所藏品であった。顧文彬は、蘇州の人、道光二十一年（一八四一）の進士であり、蘇州に怡園を営み、書画や図書の大所蔵家として知られている。過雲樓は、收藏品を収めたその室号である。その所蔵書画を録した『過雲樓書画記』（卷九）（画類五）に「八大山人二十二幅冊」として著録されているものが「安晚帖」であると考えられている。

ちなみに、『過雲樓書画記』の「安晚帖」の次に記載されている「石溪達磨面壁図卷」も、住友寛一旧藏で現在泉屋博古館の藏品である。前稿では、誤つてそれも鉄城の旧藏品としてしまつたが、鉄城の鑑蔵印や題記は無く、鉄城とは別のルートにより日本にもたらされ、寛一の収蔵に帰したものであつた。題簽は「過雲樓鑑蔵」のものがそのまま残っている（挿図4）。

この石溪の「面壁達磨図卷」上に残る鑑蔵印の大部分は、清末の嘉興の人、唐作梅の印である。唐作梅は道光二〇年（一八四〇）刊の『嘉興府志』（全六十卷、卷二四選舉志）に江蘇武進知県として載つており、また、一八世紀末に宝山知県であつたという資料も存在することから、时期的にみて過雲樓の前の所蔵者であつたと考えられる。また箱には、李鴻裔（一八三―一八五）（字眉生、咸豐元年（一八五二）の挙人）の号「香巖」が刻されている。李鴻裔は、官を辞してから一時蘇州の網師園を購入して住んでおり、顧文彬の怡園を詠んだ詩が知られていることから、過雲樓主人と交流があつたことは疑いない。さらに、昭和四年（一九二九）に三井家聴水閣に入った官拓本「九成宮醴泉銘」の旧蔵者でもあつた。これらのことを考え合わせると、石溪「面壁達磨図卷」は過雲樓から出て、李鴻裔の手を経た後、日本にもたらされたものである。

残念なことに「安晚帖」には、石溪「面壁達磨図卷」のように過雲樓

の所蔵であったことを知らせる題簽などは、何も残っていない。帙の題簽は鉄城のもので（挿図5）、画冊本体には瓊山の題簽が付されている（挿図3）。鉄城旧蔵の掛幅画の表装はいずれも、中国の明清時代のシンプルな表具（文人表装）とは異なり、濃い色合いの文様のある日本近代の特色を見せる。購入した中国画を鉄城が日本で改装したものと考えられる。「安晩帖」は画冊であるため、改装の有無を軽々に判断できないが、現状の表紙と瓊山の題簽は同程度に古色を帯び、なじんでいるように見える一方、本来あつたであろう過雲樓の題簽は失われている。表具上にも中国の鑑蔵印が見あたらないため、鉄城による改装を経ている可能性も否定出来ない。

なお、「安晩帖」の過雲樓以前の伝来については、前稿で既に述べたように<sup>17</sup>、数個の鑑蔵印を残している、武林の袁春圃が一時所蔵していたことは確かである。袁春圃については、前稿で汪世清が別の作品に関する記事のなかで清を代表する文人袁枚（一七一六—一七九七）の弟と注記することを指摘した。その後、袁春圃は、袁枚の多数の弟子中に一派をなした、袁氏一族の詩人たちの一人で、『隨園詩話』（巻五）に以下のように記され、また、同書巻十二から袁枚六十三才の時（一七七七年）に蘇州で觀察使であつたことなどが明らかに<sup>18</sup>なつた。

「余春圃香亭兩弟詩皆絶妙、而一累于官、一累于画、皆未尽其才」

（訳）私の二人の弟である春圃、香亭の詩は皆絶妙であるが、一人は官界に深くかわかり、一人は画に深くかわつたため、二人とも未だその才を尽くすことができない。

ここにいう香亭は、袁枚の十四歳年下の父方の従兄弟で、乾隆二八年（一七六三）の進士、袁樹の号である。彼は袁枚の「弟」のなかでは最も名の知られた人物である。もう一人が袁春圃で、官は皖江（今安徽蕪

湖）の臬使（按察使）に至つたという。袁枚が、「累于官」（官界に深くかわつた）というのは進士であつた袁樹のことを指しており、一方「累于画」（画に深くかわつた）は、袁春圃が多く、の画に鑑蔵印を残す収蔵家であることと符合する。袁氏一族の出身地は、武林（杭州）であることから、「安晩帖」の旧蔵者「武林袁春圃」は、この袁枚の「弟」袁春圃とするのが妥当である。従つて乾隆朝後半（十八世紀後半）頃、「安晩帖」は袁春圃が収蔵し、隨園のあつた南京やその周辺の（袁春圃の任地を含む）江南地域にあり、その後も、十九世紀半ばに、蘇州の過雲樓顧文彬の手に帰すまで、ひきつづき江南にあつた可能性が高い。

そして、蘇州の怡園主人顧文彬の過雲樓にあつた「安晩帖」が、どのような経緯で、過雲樓から出て、鉄城の手に渡つたのか。それは、残念ながら不明とせざるを得ない。「安晩帖」の中箱蓋裏題識に、鉄城は、三十年來八大山人画を見てきたと述べるが、石涛「廬山觀瀑図」のように三十年前に清国で購入したとは明記していない。ただ、同時に割愛した二作品の題識に、同じことを繰り返して述べる必要もないことから、「安晩帖」も三十年前に清国で購入したもので、十年後の改装の折りなど、何らかの機会に江上瓊山に題簽と題跋を依頼したと考えることも可能であろう。

いずれにしても、鉄城の最初の訪問で、清国の文人と交流し書画をとにも鑑賞し、渴望して数十幅を購入して帰り、数年後の再訪の際にも数十幅、さらに帰国後に様々な伝手を駆使して数幅を追加した、いずれかの時点で、「安晩帖」も遅くとも明治四一年（一九〇八）以前に鉄城に帰っていたことは明らかである。

### 三、桑名鉄城の訪中と北方心泉

明治三〇年（一八九七）から二度行われた訪中時、鉄城は、まだ30代前半であった。その訪中時に、清の篆刻の新風を学び、帰国後に篆刻家として名を馳せたと言われている。鉄城が、二度の短期間の訪中で、このような成果を挙げ、また多くの作品を入手できたのは、鉄城自身の熱意にもよるであろうが、それを可能にする中国文人とのネットワークが、すでに準備されていたからである。それは、鉄城の書の師であり、東本願寺の中国布教を担った北方心泉（一八五〇―一九〇五）の力に与るものであった。<sup>19</sup>

北方心泉は、金沢の常福寺に生まれ、京都の東本願寺に出た浄土真宗大谷派の僧であった。<sup>20</sup>常福寺は北陸における真宗大谷派の中心的寺院の一つであり、富山出身の鉄城は、まず金沢へ出て心泉に書を学んだ。心泉は、日本の僧の多くがそうであったように、仏教の教学の他、漢学や漢詩、書を学んでいた。東本願寺は、開国間もない明治九年（一八七六）に、海外布教の一環として上海別院を設置し、翌年明治一〇年（一八七七）には、心泉が上海に派遣されその任に当たった。そこで、中国の高僧だけでなく、儒者や書画家と積極的な交流を行ったことが知られている。特に、清を代表する大儒（大学者）、杭州の俞樾（一八二一―一九〇六）との間に結ばれた親交が特筆される。<sup>21</sup>俞樾には多くの門弟がおり、そのなかには曾國藩（一八一―一七二二）のような文人政治家や、上海で活躍した書画家呉昌碩（一八四四―一九二七）なども含まれていた。明治一七年（一八八四）に一旦帰国した心泉は、清の書風を取り入れた新しい書法によって、書家として名声を博した。上海を離れる時、翌年の心泉の父の古稀の祝寿のために多くの文人が書画を贈って

いるが、そのなかには呉昌碩の作品もあった。後に述べるように、呉昌碩は、怡園で定期的に行われる雅集の参加者でもあり、心泉と「安晚帖」の旧蔵者である怡園主人とをつなぐ可能性のある人物といえよう。

その後、心泉は南京開教の準備のため、明治三〇年には再び派遣の命が下り、翌三一年（一八九八）に渡清し、楊文会や蘇州の沈善、張常惺ら名士の支援をとりつけ、南京、杭州、蘇州に浄土真宗の布教場が設置されたという。一時帰国し、明治三二年（一八九九）に再訪し、上海、南京間を往復した。<sup>24</sup>

心泉の書の弟子であった鉄城は、明治三〇年に第一回の訪中を果たす。それは、翌年三一年の心泉の再度の渡清には先立つものの、その時期は、心泉による後期の布教活動の開始時期とほぼ重なり、また上海、蘇州、杭州という訪問先は、心泉がすでに清の文人達と深い交友関係を築いていた地であった。<sup>25</sup>この頃中国では、日清戦争で悪化した対日感情が好転し、日中関係も、良好な時期を迎え、明治三十年代には、渡清する日本人が増えた。その際に、すでに日中の文人達の交流の場になっていた東本願寺の上海別院や杭州学舎などが、訪中した学者書画家の足場になったのである。<sup>26</sup>

鉄城は上海で、徐三庚（一八二六―一八九〇）（清末の書家篆刻家）や、趙之謙（一八二九―一八八四）呉昌碩（一八四四―一九二七）らに学び、それによって、帰国後篆刻家としての地位を築く。実際は、鉄城の訪中当時、趙之謙はすでに亡くなっており、徐三庚への直接の師事も考えにくい。<sup>27</sup>上海で当時主流であった彼らの篆刻法を学んだということである。ただ、少なくとも呉昌碩とは直接の交流が考えられる。そして、呉昌碩は、「安晚帖」の旧蔵者顧文彬の孫、顧麟士が怡園で主催した画社のメンバーであった。

明治三〇年の最初の訪中で鉄城は、上海・蘇州・杭州で、呉昌碩をはじめとする文人達と交流し、書画とともに鑑賞し、自らそれらの書画入手することを「渴望し」て「囊を傾けて」数十幅の作品を入手することが出来たのである。それは、書の師であった心泉が彼の地で築き上げた人脈がなくては、到底かなわなかったはずである。

#### 四、鉄城訪中時の怡園（過雲樓）

鉄城の訪中時期、明治三〇年（一八九七）とその数年後、蘇州で顧文彬（一八八九年没）亡き後、そのコレクションを引き継ぎ、怡園主人として画社を主催していたのは、孫の顧麟士（一八六五―一九三〇）であった。彼は、官には仕えず、祖父や父が営んだ蘇州の怡園で金石書画を娛し、毎月画社を開き、呉昌碩、金心蘭、呉清卿など、多数の画家たちがみなその画社に属し、揮毫作画、論書評画、切磋琢磨し、怡園は、光緒（一八七五―一九〇八）中葉頃、「遂為有清一代芸苑伝人之殿」（遂に、清一代の芸苑伝のなかの人々の殿堂）と称されていた。<sup>28</sup> その時期は鉄城が訪中した時期（一八九七年と数年後）と重なっている。

顧麟士は後六三歳の時（一九二七年）、自身が蒐集した作品を録し『過雲樓書画記』続編を刊行しており、それに拠れば、彼の関心は、専ら董其昌や清初の六大家など正統派の作品にあったことがわかる。<sup>29</sup> 正統派と対極的な遺民画家の八大山人や石溪の作品は、顧麟士にとって比較的割愛の対象としやすいものであった可能性も高い。特に花鳥や人物は、正統文人の愛好からは外れる画題である。好みの作品を得るために、所蔵品を手放したり、同好の士と交換したりすることは、收藏家に一般的なことであったし、また一方で、所蔵家たちが作品を手放さざる

を得ないような社会的経済的な状況も生じつつあった。そのような時代背景のなか「安晩帖」や先に述べた石溪「面壁達磨図」も、過雲樓のコレクションから出たと推測されるのである。

鉄城が、具体的に、誰からどのような経緯で「安晩帖」を入手したのかを伝える資料は存在しない。現在知られている心泉の交流相手などを見る限り、直接過雲樓からの入手は考え難く、心泉と怡園主人の共通の知り合いであった呉昌碩の仲介などが想定される。或いは、帰国後に「百万搜索して」入手した数幅に含まれるかもしれない。その場合でも、ここに述べたような、中国の人脈によるのであろう。それは、彼の書の師で、浄土真宗の布教活動として、早くから中国に渡り、そこで多くの文人たちと交流し、大儒として遇されるまでになっていた北方心泉が、上海、杭州などの江南の地で築き上げていた文人間のネットワークであり、それなくして、鉄城の訪中とその成果である中国書画の収集はあり得なかったことは間違いないのである。さらに言えば、その後大正期や昭和初期に盛んになった、日本の書画家や学者、財界人たちと、呉昌碩らの中国の書画家、文人との交流や、新たな中国書画コレクションの形成を考える上でも、東本願寺の江南布教活動やそれを担った北方心泉の果たした役割は、その先駆けとして重要である。今後さらなる考察が必要であろう。

#### むすび

鉄城の訪中と中国画収集、それに先立ち、明治維新後間もない時期に企画された東本願寺による清国、特に江南地域への布教活動と、それを担った北方心泉や、当時上海などに長期滞在していた日本人たちが、江

南の文人たちと築いてきた交流は、その後の日本と中国の学者文人や書籍、書画の往来をもたらず重要な下地であった。それは、その後、時代が下って、日中間に起こった様々な歴史を思えば、近代初期の日中間の文化交流の幸福な時代の名残りともいえるべきかもしれない。

日本側から見れば、清の新たな書法や篆刻法を学ぶことが、心泉や鉄城を著名な書家、篆刻家に押し上げた。それは、日本で脈々と受け継がれてきた漢学の素養と、乏しい情報のなかで抱き続けた中国文化への渴望という素地があつて、はじめて可能になった新たな文化受容であつた。いいかえれば、そのような清の書法や篆刻の新風を、熱く迎える人々、中国文人文化への素養と情熱をもった愛好者が、当時の日本、特に上流の人士の間に数多く存在したことを物語っている。

明治時代前期や日清戦争後の一時期に見られた、このような幸福な日中の関係は、やがて大きく変化し、ここに記したのと同様の中国と日本の文化交流に携わった中国の学者や文人が、日中戦争時代を経た後には、中国から見れば売国行為として糾弾され、処刑されるなどの悲劇的な結末を迎えた。<sup>30</sup>

ここに、「安晩帖」の日本への伝来について考察するのも、今日では想像することが難しい、過去の日中の幸福な交流にかかわる様々な活動や、文人たちの交友を記憶に留めると同時に、その中で実現した「安晩帖」の日本への舶載について、目下知りうるところを明記しておきたいと思うからである。

1 拙論「八山人の甲戌年」『泉屋博古館紀要』二八巻 二〇一二年八月

1~18頁

2 その後、中国の雑誌からの依頼で、特に伝来に関して訂正加筆したものを投稿し、刊行された（汪瑩訳「安晩」八山人的甲戌年）『紫禁城』二三四期 二〇一四年七月号110~123頁。ただ、そこでは紙数の都合であるう、伝来に関する部分は大幅に略されていた。

3 その後昭和五五年には、住友家所蔵の中国書画が寄贈され登録博物館として公開された。さらに茶道具や日本絵画など数多くの作品が住友家から寄贈され、展示室も増築され、東京分館も設置され今日に至る。筆者は、中国書画の寄贈と公開の最初の図録作りにも携わった。

4 桑名鉄城は、篆刻家として名を馳せたが、本来的には、彼が中国で学んだとされる趙之謙、呉昌碩などと同様、書画篆刻すべてを身につけた文人画家というくりに入ると思われる。私が、住友家の名蹟の旧蔵者として、恩師鈴木敬教授からその名を聞いた時には、「京都の画家桑名鉄城」と呼ばれていた。今日、そのような伝統的文人の総合的な技芸についての概念が共有されなくなったため、その最も知られているものを取って篆刻家と呼ぶこととする。

5 「八山人画無一点塵俗之氣、余三十年來所見山人画、多贗本而其真跡罕也。此冊予曩得之、珍襲久焉。今無為先生、一見欣賞不置、仍割愛貽之、并記其由、於繖蓋山下翳翠莊。峇丁卯桂月、鉄城山人箕。」

6 実方葉子「住友コレクションにみる中国絵画鑑賞と収集の歴史（資料編）」（『泉屋博古館紀要』23 二〇〇七年）によれば、住友寛一に譲渡された桑名鉄城旧蔵中国画は、ここに挙げた「安晩帖」、石濤「廬山觀瀑図」、高鳳翰「雪石図」の他に、奚岡「傲王蒙修竹遠山図」がある。他の桑名鉄城旧蔵品はのち散逸し、絵画の三分の二は戦後に橋本末吉が譲り受けた。

7 『九華印室館蔵画録』には、「安晩帖」から八山人の自跋と「翡翠図」

が、朱奮（八大山人の俗称）筆として掲載されている。

- 8 『九華印室鑑藏画録』下卷（文星堂 一九二〇年）巻末 桑名鉄城跋「明治丁酉春三月、予始航清国、薄游杭蘇。與諸名流締交撫覽宋元明清名画珍蹟。渴望不禁、遂傾囊購數十幅、而歸後數年再遊所購不下數十幅。猶且不飽、歸朝後百方搜索、又獲佳品數幅。人或以玩物喪志以箴予。予曰玩物源發之、其流弊至沈溺為害。古人所已有箴也。然人々風尚之殊、嗜好之僻在所不免。況如書画。古人心血所注、風韻所存。賞當以暢我神氣。未見其有害也。因選所收藏卷冊掛幅八十有餘、付之玻璃版印刷、以為二冊、題曰九華印室館藏画録。頌同好偕其樂。若其書迹、則將俟他日再行選印。昔庚申（一九二〇）夏日、桑名箕識。「桑箕」（朱文方印）「九華」（朱文方印）
- 9 顧文彬（二八一—一八八九）は、元和（今の蘇州市）の人。字を蔚如、号を子山、紫珊、晩年の号を良齋といい、室名を過雲樓と云った。道光二年（一八四一）の進士。湖北漢陽府知や、浙江寧紹道臺などを歴任した。琴、書にすぐれ、鑑賞に精しく、また多くの文集も残した。すぐれた所藏品で知られた。晩年引退した後、三人の子とともに蘇州に怡園の別業を営んだ。（薛正興「弁言」『過雲樓書画記・続記』江蘇古籍出版社刊、一九九九年）現在怡園は公開され、隣接する過雲樓も修復工事が行なわれているようである。
- 10 拙論「八大山人の甲戌年」（注1） 5頁
- 11 二〇一〇年香港佳士得が扱ったオークション出品作の史忠「赤壁遊図巻」に唐作梅の鑑藏印があり、ここに見える「秀水唐氏」「帰来草堂」「緑谿山莊收藏之印」「唐作梅」「北枝生」「士燮」印のすべての印が押されてゐる。 <http://pm.findart.com.cn/1908759-pm.html>（二〇一四年一〇月二八

日現在）他にもいくつかの作品に鑑藏印が見え、收藏家であったことが分かる。

- 12 于尚齡『嘉興府（浙江）志』全六十巻は、ハーバード大学提供 [google.com](http://books.google.com)（二〇〇八年九月デジタル化）による。
- 13 『上海旧政權建置志』に拠れば、唐作梅は一七九四年に彭元環に替わり宝山県知県の職を引き継ぎ、一七九五年には崔兆麟がそれを引き継いだという。 <http://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%94%B4%E6%A2%85>（二〇一四年一〇月二六日現在 以下ネット引用の日付は同じ）
- 14 実方葉子「前掲」（注4）
- 15 李鴻裔の伝は、百度百科、李鴻裔の項に拠る（出典：李玉安、黄正雨『中国蔵書家通典』中国国際文化出版社、二〇〇五年）（<http://baice.baidu.com/view/216559.htm>）。彼の詩作の代表作として「怡園」を詠んだ七言詩「置石疎泉不数旬、水芝開出似車輪。石幡一夕桃花雨、便有紅魚跳緑萍」が挙げられている。
- 16 「九成宮醴泉銘解説」三井文庫編集『聴水閣旧蔵碑拓名帖撰』（一九九八年 123頁）によれば、帖尾に道光二〇年（一八四〇）の張培敦（一七七二—一八四六、呉県の人）などの跋があり、帖の後半に李鴻裔を含む数人の印記があり、昭和四年（一九二九）に聴水閣に入ったという。
- 17 拙論「前掲」（注1） 9頁
- 18 王英志「論袁氏家族男性詩人之功過——性靈派研究之一」『蘇州大学学报』（一九九五年四号）（<http://dlb.zslib.com.cn/qklw/rda/RDA66/RD033344>）では、袁春圃を含む袁枚の一族の男性詩人たちについて論じ、袁春圃については袁枚の族弟（父方の遠縁の年少の男子）の一人であろうとし、出典は示さず、官は皖江（安徽蕪湖）の臬使（按察使）に至ったとする。また『隋園詩話』（巻十二）に「余六十三歳：時、家弟春圃觀察在蘇州：…」とある。按察使は正三品官。觀察使は地方官の古名。袁春圃に関する情報は少

なく、その名も、号と思われる春圃しか知られていない。『随園詩話』（浙江古籍出版社、二〇一〇年 79頁・242頁）。

19 鉄城の訪中には北方心泉による東本願寺の伝手が重要であったことは、曾布川寛氏から口頭で教示を受けた。

20 北方心泉、本名は蒙、号小雨、月莊、文字禪室、聰松閣など。嘉永三年（二八五〇）、金沢の常福寺十二世の三男として生まれた。常福寺は、加賀における浄土真宗大谷派の中樞寺院であり、代々京都東本願寺へ人材を送り、京都と加賀の信徒を結び、京都の学術を直接に加賀にもたらすたいパイプの役割を果たしていた。（本岡三郎編著『北方心泉「人と芸術」』二玄社 一九八二年）。

21 俞樾（字蔭甫、号曲園）は、浙江徳清の人で、一八五〇年の進士。数年で官を辞し、蘇州や上海、杭州などで教育に携わった。清末を代表する学者である。一八七五年蘇州に曲園を開いた。「安晚帖」の旧藏者、顧文彬も、当時、故郷蘇州に怡園の別業を経営していた。

22 北方心泉は、杭州に俞樾を訪ね、岸田吟香とともに、日本人の漢詩集の選と編集を依頼し、それは『東瀛詩選』として、明治一六年（一八八三）に刊行された。本岡『前掲』（注20）

23 明治一七年、古稀を迎えた心泉の父の祝寿のための書画幅が常福寺に伝わっており、徐三庚、朱大勛、張子祥、任伯年、胡公寿、楊伯潤、呉昌碩、朱夢蘆、陳曼寿、彭玉麟等の揮毫が見られるという。呉昌碩の作品は竹石図である。常福寺には他にも俞樾を始めとする清の文人たちとの親しい交友を示す書画や書簡などが多く伝わるという。（本岡『前掲』注20）

24 心泉と中国文人の交流については、川邊雄大『東本願寺中国布教の研究』（研文出版 二〇一三年）181〜228頁に詳しい。

25 当時の心泉の中国での活動については、川邊『前掲』（注24）236〜243頁「明治三十年代における交流」に詳しい。

26 川邊『前掲』（注24）234〜236頁。内藤湖南も、明治三二年に渡清し、杭州、南京の東本願寺学堂を訪れている。

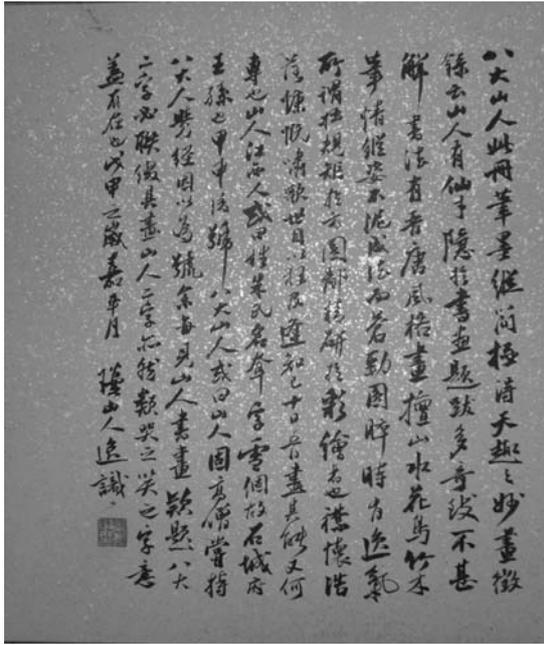
27 川邊『前掲』（注24）197〜198頁によれば、北方心泉も徐三庚とは直接の交流がなかったという。

28 「光緒中葉、怡園名流雲集、群賢畢至、毎月開画社、呉昌碩、金心蘭、呉清卿、顧若波、王勝之、費肥懷、陸廉夫、顔蕓生輩、咸隸社籍。屆時、案陳琴豊、雜供花葯、揮毫洗墨、論書評画、切磋琢磨、技芸精進、意得神怡、樂在其中也矣。怡園水木清華、遂為有清一代芸苑傳人之殿」薛正興「前掲」（注9）（3頁）所引『呉県志』に拠る。怡園主人は時人に倪瓚の清秘（ママ）の遺風があると称されたという。

29 薛正興「前掲」2〜3頁、「麟士宗法清初『四王』、游情翰墨、興至写山水、…」。

30 拙論「吉祥図案解題」と野崎誠近『復刻版 吉祥図案解題』下（ゆまに書房 二〇〇九年）406頁に述べるように、野崎誠近の友人であり跋を寄せた王輯唐（一九〇三年の進士、安徽派の政治家）は、親日的であったことにより、戦後上海で処刑された。また、谷崎潤一郎や吉川幸次郎らとも交流した日本文学研究者の銭稲孫の場合については、鄒双双『漢奸と呼ばれた男』（東方書店 二〇一四年）に詳しい。

31 残念なことに、今日的視点から見た誤解によって、中国では、「安晚帖」は海外に不当に持ち去られたとする説があると側聞する。



挿図2 「安晩帖」 江上瓊山跋



挿図1 「安晩帖」中箱蓋裏 桑名鉄城題識

※ 挿図作品はすべて泉屋博古館所蔵。  
 挿図1・2は泉屋博古館提供写真。  
 挿図3～5は著者撮影写真。



挿図5 「安晩帖」外帙  
 桑名鉄城題簽



挿図4 石溪「面壁達磨図卷」  
 過雲樓題簽



挿図3 「安晩帖」表紙  
 江上瓊山題簽